

チェコ東部のモラヴィアに生まれたヤナーチェクは、少年聖歌隊で音楽の才能を見出され、教員養成学校を出るとプラハやライプツヒ、ウィーンなどに赴き音楽を学んだ。そしてモラヴィアの首都ブルノに戻ったあとは、オルガン学校を開設したり、音楽新聞を発刊したりと、地域の音楽文化に大きく貢献している。モラヴィア民謡の収集にも熱心で、その旋律やリズムを自作に採り入れながら独自の作風を確立した。

Leoš Janáček (1854–1928)

レオシュ・ヤナーチェク

故郷のモラヴィアを愛した

A

2025

FEBRUARY

[第2031回]



ブルノの市庁舎に、シュピルベルク城の城壁に
誇らしく響きわたるファンファーレ

イラストレーション: ©IKE

シンフォニエッタ

最晩年につくられた小交響曲

《シンフォニエッタ》には、ヤナーチェクの愛国心があふれている。第1次世界大戦後、ついにチェコが独立宣言した当時の高揚感や作曲者の喜びが伝わるような、晴れやかな曲調だ。作品は、ブルノのシュピルベルク城や、当時のブルノ市庁舎といった風景に絡めて作られており、祖国を誇るヤナーチェクの姿が目に浮かぶよう。